4　メルグ星人

そんな日々をやり過ごしているうちに、レグルス2号はとある恒星系にたどり着いた。最後の補給基地を出てから八週間が経過していた。

その恒星系は、メルグ星人の領空に近いところにあった。

「そろそろメルグ星人の支配する領空に接近するぞ」

ジョージがモニターを見ながらマテウスに向かって言った。

「しかし、あの星域は〔　Ａ　〕でメルグ星人の領空から外れているはずだ」

いつもの冷静な口調でマテウスが説明する。

そこへ、酒瓶を片手にキリルがやってきて、

「しかし、メルグ星人さんも、おれたちみたいに調査に来ているかも知れないぜ。鉢合わせになったらどうするよ？」

と面白がる。

マテウスは表情を変えずにあしらう。

「我々地球人とメルグ星人は、戦争状態にあるわけではない」

「しかし、同盟関係にあるわけでもないよな」

キリルの言う通り、地球人とメルグ星人は現在同盟を結んでいない。

〔　Ｂ　〕、お互いに敵対しているわけでもない。これまで、メルグ星の中で地球と同盟を結ぼうという動きが何度かあったのだが、なぜか、知らない

さくらぷりんと®

うちに同盟の話はなくなってしまうということを繰り返してきた。

ジョージがまた声を出す。

「ビウルジョカ恒星系、ハビタブルゾーンに惑星一つ。これより大気調査に入る。おっと……キリルの勘が当たったね。先客がいらっしゃるようだ」

ハビタブルゾーンとは、『生命が生存可能な領域』という意味である。分かりやすく言うと、地球と似た生命が生きていくことができる領域である。それは主星からの距離によって決まる。たとえば、太陽系で言うと、地球はハビタブルゾーンに位置するが、火星はぎりぎりハビタブルゾーンから外れる。ある惑星がハビタブルゾーンにあったとしても、水が液体で存在することや、大気があるという条件が満たされなければ、生命は生きることができない。ある惑星がハビタブルゾーンにあるからと言って、そのまま地球人が生きていけるとは限らないのである。

古くは、プロキシマ・ケンタウリｂという惑星が、ハビタブルゾーンに位置するため、生命居住の可能性が取りざたされたこともあった。かれこれ四千年前のことである。しかし、多くの科学者が予想した通り、地表の大気は主星からの強い放射線によってはがされていた。プロキシマ・ケンタウリｂは、主星であるプロキシマ・ケンタウリとの距離が近すぎたのだ。地表に大気がなければ生命は存在できない。惑星がハビタブルゾーンに位置するからと言って、過大な期待を持てないことは、プロキシマ・ケンタウリｂの例でもよく分かるだろう。

さくらぷりんと®

したがって、今レグルス2号がたどりついたビウルジョカ恒星系のハビタブルゾーンに惑星があるからといっても、生命が存在できる環境かどうかはまだ分からない。

さて、ジョージの言う先客……つまり、このビウルジョカ恒星系に、メルグ星人かキョブ星人のどちらかは分からないが、地球人以外の誰かがうろうろしていることは確かだ。

しばらくして、通信モードをオープンにしたレグルス2号に、相手の宇宙船からの通信が入ってきた。先客はどうやらメルグ星人のようであった。

『こちらはメルグ共和国所属、惑星調査艦艦長、クウニ・ド・ラインである。本艦は非武装であり、攻撃の意志はない。貴艦の返信を求む。』

レイギタダシイ挨拶であった。ならば、こちらも失礼のないように返信しなくてはならないだろう。

「お客さん、メルグ星人の皆様だってさ。ところで、うちらの船長って、誰だっけ？」

ジョージがふざけると、キリルが酒をあおりながら、

「がっはっは、おれに決まってるだろ。船長といやあこのキリル様よ」

「おい、待て」

船長のマテウスがあわてるが、二人はお構いなく続ける。

「じゃあ、キリル船長。返信のお言葉をちょうだいします」

「え、ええ。おほん。あー、あー。テストテスト。あー、こちらは。あー、

さくらぷりんと®

あー。地球連邦政府所属調査船、レグルス2号でありまーす。あー、あー。本日は、お天気もよく。皆様ようこそいらっしゃいました。ってこれじゃ結婚式のスピーチか。がははは」

「そうじゃないだろう。じゃあ代わりにこのジョージ・スプリングフィールド船長様がお手本を見せるぜ。ええ。おほん。こちらは、地球連邦政府所属調査船、レグルス2号だぴょん。こんなところで、メルグ星のお友達に会えるなんて、とーっても嬉しいぴょん。今から、手作りピザを作って届けるから、たーのしみに待ってるぴょん」

おふざけが止まらないキリルとジョージに対して、ついにマテウスが怒りを爆発させた。

「いつまでやっとんじゃい！」

さくらぷりんと®

5　ピザ最高

恒星ビウルジョカ第四惑星の上空で、メルグの調査船とレグルス2号が停船している。お互い非武装であるし、直接お会いしましょうということになった。そして

『せっかくなので』

ということで、ジョージの手作りピザでパーティーをすることになった。

ジョージがピザを作り、それを持ってメルグの調査船にお邪魔する。それでもって、みんなで飲み食いするというのだ。つくづく、おめでたい奴らである。

メルグ星人は、地球人よりやや小さい。メルグ星人の身長は平均で百四十センチメートルくらい、大きくても「　C　」百六十センチメートルくらいだ。地球人の小学生サイズだと思えばよい。

「　D　」、艦長のクウニ・ド・ラインという人物は、豊かなひげをたくわえ、とてもイゲンがあり、いかにも艦長というオーラがただよっている。それでいて、威張り散らすところは少しもなく、なかなかの好人物であった。

マテウス、ジョージ、キリルの三人は、大変なもてなしを受けた。おみやげに持って行った手作りピザも大好評であった。

互いに自動翻訳機を通してのやり取りではあったが、パーティーは大いに

さくらぷりんと®

盛り上がった。

「やっぱり、酒があればメルグ星人だろうが地球人だろうが関係ないな！がははは」

とキリルが上機嫌で言うと、

「その通り。宇宙は広大で、我々は小さい。小さな我らが銀河の辺境で、何のご縁があったのやら。ただの偶然で済ませるのも味気なく思います。今日は楽しくやりましょう」

とクウニ艦長もご機嫌だった。

メルグ艦の乗組員の中に、ドン・ケマム・ビツタシンという男がいた。クウニ・ド・ライン艦長の副官である。ジョージもキリルも、名前が長くてめんどうなので、『ドンちゃん』と呼ぶことにした。

気が付いたら、マテウスまでが彼のことを『ドンちゃん』と呼んでいた。

しかし、マテウスの話の内容は、やはりというか真面目であった。

「これはあくまでも一人の地球人としての意見だが、やはり地球とメルグは同盟を結んだ方がよいのでは」

すると、ドンちゃんも「自分の意見だが」と前置きしながら答えた。

「たしかに、メルグと地球の同盟が望ましい。しかし、メルグの国内は、『ホジャーニ派』と『タリアーイ派』の二大勢力が国論を二分しており、地球との同盟に反対する勢力が根強くある。つまり、『タリアーイ派』が同盟に反対している」

さくらぷりんと®

こんな真面目な話をしている一方で、クウニ艦長とキリルとジョージたちは、うまいうまいとピザを食べながらくだらない話で盛り上がっていた。

パーティーが終わると、メルグの調査艦とレグルス2号の間では、やっと真面目なやり取りが行われた。それは、このビウルジョカ恒星系の資源について、互いの権益をどうするかについての会議である。

元々、メルグ共和国は権益拡大に積極的ではない。この星系に関する権益はお互いに半々にしようということで、仮の協定が結ばれた。

別れ際に、クウニ・ド・ライン艦長が、

「ピザのお礼」

と言って、卵型の銀色の装置を五つくれた。

「これは、ミガワリニンポーという道具です。我々メルグの祖先には、『ニンジャ』と言って、不思議な術を使う集団がありました。その術のいくつかは、我がメルグの技術により再現されています。これはその一つです」

クウニ艦長は誇らしげに説明する。

「ありがたく頂戴いたします」

マテウスが両手に押し頂く。

「ほうほう『ニンジャ』ね。メルグのご先祖様にはすごい連中がいたんだね」

キリルがすっかり感心している横で、

（『ニンジャ』ってなんか聞いたことある気がするけど……ま、いっか）

さくらぷりんと®

ジョージが首をかしげていた。

それにしても、この一件がきっかけとなり、レグルス2号に乗る三人の運命が大きく動くことになるとは、この時点では誰も予想していなかった。

新しい資源を発見したレグルス2号が、トラピスト系第九ステーションに向け、ビウルジョカ恒星系での出来事を報告したところ、すぐにキカン命令が出た。

ステーションにキカンしたジョージとキリルには、一週間の休暇が与えられ、次の出動に備えるように言われた。マテウスだけは、各部署への報告に忙しいようだった。特にメルグ星人と接触したことを詳しく聞かれたらしい。

休暇の間、三名は何度か一緒に食事をしているが、その度にマテウスが、

「ライトナー中将とビジャイ中将なら、自分はビジャイ中将を信頼する」

と何度も口にした。

現在、地球連邦政府軍の中では、次の大将の座をめぐってライトナー派とビジャイ派で意見が分かれている。

ジョージは、マテウスの意見を聞くたびに、

（おれは、ビジャイ中将はあまり好きじゃないな）

と思っていたのだが、それを言うときっとマテウスは

「何を根拠にそう思うのだ」

と聞いてくるに違いないのでジョージは黙っていた。別に確かな根拠がある

さくらぷりんと®

わけではないのだが、ジョージの中では（なんとなく嫌だな）という思いがある。もちろん、単なる直感ではなく、いろいろな情報を総合的に判断した上でそう思っている。しかし、それらを理路整然と語り、マテウスにうまく伝える自信はなかった。仮に伝えたとしても、真っ向からマテウスに否定されるかもしれず、ジョージはそれが一番嫌だ。自分の意見を主張して、相手の機嫌を損ねるくらいなら、黙っていよう。ジョージには、わりとマテウスの地雷を踏んで叱られることが多い一方で、そんな一面もあった。

船に関しては、次の出動に間に合うように、レグルス２号に最新の防御ユニットを装備してくれることになっている。

ところが、レグルス２号に装備する防御ユニットを、最新のものにするかどうかで、いささかもめたらしい。この議論の中で、最新装備で行くべきと言ってくれたのがビジャイ中将で、最新装備は予算の使い過ぎだと主張したのがライトナー中将らしいというのだ。

「らしい」というのも、会議において誰がどんな発言をしたかは、原則秘密であり、部下である者たちが知る必要がないというのが軍の掟（おきて）である。だから、ライトナー中将が最新装備に反対したというのも、あくまで噂である。

しかし、その噂が本当だとしたらライトナー中将の真意が怪しまれる。新しい恒星系で資源を発見したという手柄を上げたレグルス２号である。そんなレグルス２号が装備を新しくすることに反対するのは、何か裏があると思われても仕方がない。たとえば、裏でキョブ星人のスパイとつながっている

さくらぷりんと®

などの疑惑が分かりやすい。もちろん、カクショウを持って言える話ではないので、最終的な判断は慎重にすべきだ。

マテウスはそこまではっきりとは言わないが、ライトナー中将にかすかな疑いを持っているようだった。

さくらぷりんと®

6　ゴサク

一週間が経ち、レグルス2号には最新の防御ユニットが装備された。

しかしながら、レグルス2号の乗組員は、船長のマテウス、ピザ係のジョージ、酒飲み係のキリルの三人のみである。マテウス以外はほぼ役立たずにしか見えない。そこでというわけでもないのだが、防御ユニットを管理し操作する人員が新たに必要である。防御ユニットのエンジニアとして、乗組員が一名増員されることになった。

ジョージ、マテウス、キリルの三人が出動準備をしていると、東洋系の青年が入ってきた。小柄だが、引き締まった体躯。黒い丸刈りの頭、左手の手首には、数珠のようなものが巻かれている。

「申告します。本日よりレグルス2号にハイゾクされました、ゴサク・カワギリ少尉です」

ビシッと立ってキリッと敬礼する姿は、よく訓練された軍人という印象だった。ジョージやキリルのだらけきった雰囲気とは全くの正反対である。そんなわけでジョージは

「まあまあ、肩の力抜きなよ。この船でそういう堅苦しいのはなしでたのむよ。それにしても、ゴサクって変わった名前だな」

ゴサクの肩をポンポンとたたく。

さくらぷりんと®

「いえ、その自分は……」

とゴサクがジョージの態度に戸惑っていると、今度はキリルが酒の入ったグラスをゴサクに持たせて、

「おれとはこれが挨拶がわりだ。さ、ぐいっと、そうそうぐいっとな。がはは」

勝手に酒をすすめる。

「あと、船長のマテウスさんは、二重人格だから気をつけろよ。あいつは怒ると別人のようになるからな。がはははは」

新入りのゴサクは、この変人二人の挨拶を受けて

（変な船にきちゃったかな……）

という第一印象しかなかった。

ただ一人、マテウスだけがまともそうなのが救いである。これからこの船に乗って、最低でも四か月を一緒に過ごさないといけないというのに、やれやれである。

「あの……」

救いを求めるように、ゴサクはマテウスの方を見る。

「ああ、あいつらはバカだけど、ただバカなだけだから大丈夫だ。そのうち慣れるよ。私は船長のカール・マテウス・シュルツェンだ。よろしく」

と言って右手を出して握手を求めた。

（ただバカなだけだから大丈夫……）

さくらぷりんと®

ゴサクはマテウスの言葉を心の中で繰り返しながら握手に応じた。